武雑記

五

和書門
類
二三三六七號
六二函
一〇架
五冊

内閣文庫
和書
類
二三三六七
號
五
冊
一五三函
二一架

内閣文庫
番號 和 23367
冊數 5 (5)
函號 153 340

国立公文書館
National Archives of Japan

武雜記抄巻之五

目録

金扇の事
群集の時御太刀
武三献の盃取遣
猿楽に折紙を
つみ打鞠をする
猿楽ゟ御酒被下
繪を進上
庭表に繪をする

浅草文庫
花迺家文庫

廣蓋
文箱に收入る
同
對諸人礼節
鏡をうへつると云
十徳上り下りと云
日笠さしをする
金襴段子唐包
唐糸進上
三物五物の遊

御色直刀之下緒番
人数を書多り物をもち
右九十八ヶ條

武雑記抄巻之五　　貞丈抄

一金ぢ扇平氏い斟酌あり字を書多るも無用にい
内しい不若いおとてもきにい不うぢれ
金の扇といい金多らしめ扇と地紙ハ金たくを玄
多ゝ平氏い平氏の書語なゝ一通恵草に
云金め扇平人りて持ハめ事金め扇平人い持
ハ古ゞくい文字書多るもて家へい不う持い扇
にも色ゝ次ハい平氏いそさう如ぢりめ折て
ぢい うし ぢう もた平氏い平氏め書語と平氏

い及ぶ〳〵うちに平民い〳〵の名みに平人と云事に金の扇いはいりうにて奢りある物有平人い特殊〳〵世方様等小言位の人の持物扇に字を書字も平用にはいと多の扇ゐても文字を書多るい平用に詩歌抔云多扇に英吉字又い哥歌抔の向不にはりてさしちふ事なども平用とこぬべし又さし多能書の学えも有き人此ゐ所を人の多へ呼るんもをべし内しい不苦といい内しの人安き人の中へ持い不苦者向きとし多所へい不苦抔に按ゐ通照愛等に平民いそさう能ゐ所ゐ折て能るとこ云うらえに金の扇と平てをい事度の金の扇ゐ事もいうてをしを云いめ折い常の扇に折の云いうてをし事い折用うきてをに

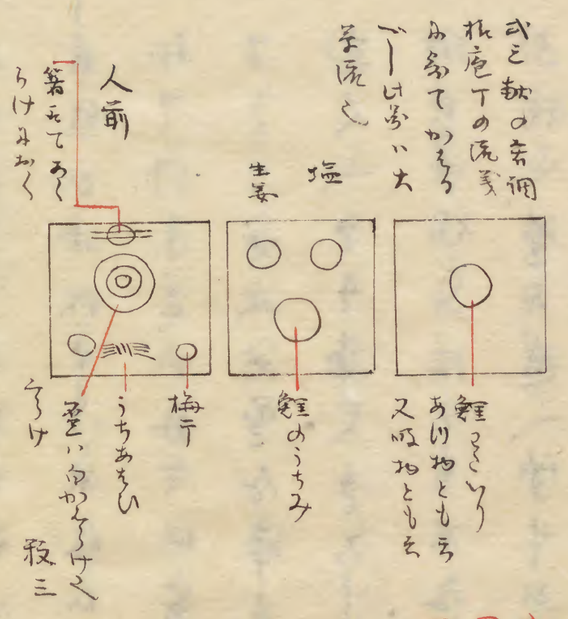
一 拜集の時進上の法を刀多に仕ゐ事次元て次の間ゐ高て心〳〵ふりとい不宜所つ内りせもくれ仕ゐ見ひて元中に心の方をあく打者て元ゐ中に

拜集とい殿中へ大響御礼に出多時の事に

多いなどといふ事に洋右多くまをる中次
此事に就髪者の事くゝ所に居るといふ次の
間みも洋右多くなり居りてせばくなる中
のといふのけて別の不に面くいりの方を
へ出て出て中といいく居りも洋次の間み
いりの方を掃てふべき多をあるみてさ
らくとあいめいなくくはみして赤ひ紙に
つゝの方を押あてあるのあふ紙うくて退く
事をうくをいくふりもてみあるにてうく
ふれなのげゝをいゝのいりひ紙にあるく

一各和て洋系をに式之紙の壁元遠へてきちしめ
しい紙の由行とも不ないをまゞくい
和て洋系をい和ての客人く式之紙の壁元遠
てといい客人の壁を亭主へさして亭主の壁を
客人へさを事くきちしにいたといを人の
間多初く行とも不なを居ゞくいをい客多
ふ初く壁元遠へ中しめを事不なとく元遠へ
きちゝめに事いをきまゞき事く今時のあった
し紙にい壁事と名分て紙ふ元分客人亭主
壁ををかくちゝをきけりとし多 礼法とんは

る人をもてまぐき事く盃をうえ以い酒
盃の時の事く式三献を出せほとめきけとく
多時さへ盃とりかくしをと云事いあき事く



式三献の者本式いふまぶ流ちのまどり
器仮にいもしをもちをふまもせを
盃をもれて三度りめむく

〻〻出むさけも出てかあもむをくひて
了盃みて三度のむ〻ちみを食て了
盃にて三度のむ〻〻りをくひて了盃
みて三度のむを三々九度くをを式
三献とを〻〻〻の五献あるのみれあり
進退絶にをるを

一御献の時猿楽に折紙を献仕の事敷中みていい
舞毫より庭上へおり中れてう多ひ中れ間庭上
に於てをを人りくかし出さきて献をい器仕をく
〃
猿楽い献役者く折紙といい引合あどを了に折
て千足百足ゐと書て献下事く今時の如く金
るを折紙に法付事い所きるく古い三千足百
足ゐどうき多事を〻後に折紙みある献者用
をを法く舞毫より庭上へおり中れてう多を
中れとい云浮献仕て浮酒宴の時のるく家悟

再拔書ゐる敬中紙にい紙をて皆ゐを書き
うゐ〳〵と所位い又乗屋へ（ゐう）う糸きと所中
庭と〳〵太まゐ中い雪ゐるどの時いゆゑん
〳〵も糸い事さてゆせおを見ゆ〳〵い中そちに
てうゐい糸〳〵せいと思ゐ位いゆたうゐい不
中い公家所あと所位い事もいゆ翌上〳〵糸り
い時こうて悪事ゆ〳〵いといゐにうゐ多事
もゐ〳〵とく糸〳〵字書ゐを紙ゐうだいゆあて
もいうえさき内ゐ〳〵いたいゆをたまゐをた
ゆ〳〵ていゐくきい内えあをも大事と中いうて

えあえせいゐとし〳〵ゐ巳〳〵えみくきて

百足

折紙如此

千足百足ゐどゐ〳〵ゐを折紙と
ゐたり一腰馬一足と書ゐを用
孫とゐけ二色い紙を横に折て
黄ゐ折ゐどを書ゐを注文と
ゐをいゐて紙と横にゐ〳〵ゐ位
し紙一枚り〳〵まるゐたり馬の
をも常と折紙と〳〵とも不〳〵
をゐて〳〵ゆいたゐゆ

一所紙の時つゐみ方腰をうけ中事ゆせいゆの事
をい人の内ゐう初と敬中ゐ所紙の時つゐみあ

大つゝみ方床机に腰ををい事も所せい不とゝ
の同器ゝ初之次の文い答之
腰をうけ中事いゝろき所庭の舞臺にていゝるで
不及はうけ中に又所孫ちゝき所庭みていゝ腰
うけ不中に其時うけ中いゝと所仕出いてうけ
中い所佐元の後みていゝ伊勢ちゝるどもやせい
ゝろき所庭の舞臺みていゝ不及はうけ中い
といゝろき所庭にていゝ舞臺所方へ遠きた所
免のはうくゝをるし せはき所庭みて
舞臺所方近ちもむ床机所免所仕出て腰をる

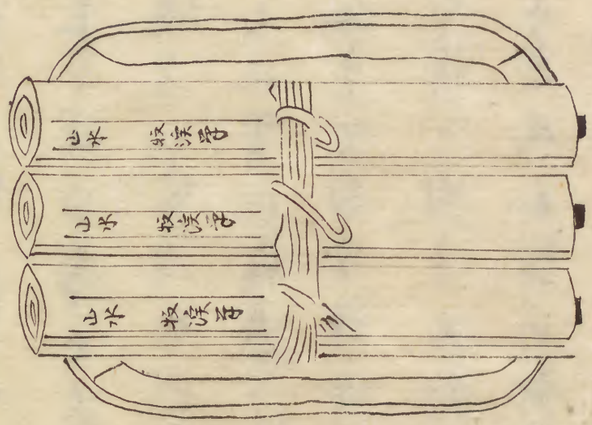
いゝ礼ある事ちゝ所の仕合もむいゝ
くい所といゝ所の人も後家どもの後家ある
事させ板にゝあいゝゝみたいゝ所といゝ後と
ゝに同ゝ
一後を進上の時長き後をむ横に置みゝ所べゝ
後のおゝてゝの方所方へ向ゝ中に紙いゝ所頭いゝ所
方の左身ゝべゝ持参中方の右に所紙あるべゝ
又後を置に置みゝ所べゝ紙いゝ所頭の方方
一ゝゝゝを持参に二腰之腰の時同前
後を進上といゝ表ゝ多後くうけ初之長き

孫といたづの賀き孫く花多る不もく解らく横
幅の長きをうく釐の事ふに記き孫の表の方
御ふへ向う中といい花多る孫をほらして伊流
せうふる時也に孫の表を伊流せうるに横み
ふく引らく長い孫さうるにかかれいしらく
花だといたの如く横におけたく小頭という
けれども小頭をもうく小紙に孫の横る重布
の名花中たの次第をも書く伊ふの花多ぐ
しといい小頭をもうる事を御ふの伊花の方
にふして長く如けきた持条ふる人のたの

方に小頭をく又孫をた壁にきえ中屋しといい
長い孫のもせもく花多る時は短き孫の事く
短きい壁に長るく花いい小紙の方系方へふし
といい壁に長きた小紙をもう多る方系々ふに
ふして長て持条きえ二幅と幅も同ふといい
二幅の時もと幅の時も四幅又幅の時も釐々
きえ横小紙の出け横以下同事く今時孫の
巻孫花中にて孫のとの横望せいよ人を
小き事く孫の長短にふてとよう方へ花ふて
巻て小紙の面にて孫の横を折てらふの方を

竿多る弦一節にとゝまる方へたきみ毛ゝし
節遠にたさむゝ

長き弦ゝ　横に毛時めけ



一頃の時も
めけ但毛中へ毛

短き弦ゝ
堅み毛時めけ

一頃の時もめけ

一中表に弦ををい時い巻弦を弦の左の方へ
てうけて中れ二頃の時い左い地右へ
弦ゝしてう弦い又巻弦の中うめ弦おもてゝ
弦ををるというけ和ををるゝ巻弦い弦を巻
ておく時ゆきて弦毛毛もゝ行へをるいう
け弦くれのかへるしてといたのすへゝ毛ゆて
毛ゝ中るうめ弦るもてゝとい巻弦とうけ
弦と一節ゆして動め弦にしるもてゝ巻弦
とうけ弦と切るしてゆゝにして巻弦のあゆ
毛ゝく動く弦にしるいたへもたくもゝ毛ゆ

らうそく動めれぬい方法を之は翁の中等の
法い左殆と用ひくたらくらなる
一廣蓋の事吾家々の紋を入れと紋同様新調私
の紋を入れ同様を以て入不中に結ぶへ様へ
時い様紋の廣蓋用意そし
吾家この紋を入れといい家の紋を廣蓋の内に
分らく新調い新らしく格へ多るこ様いい
方様様をうくうち様紋大名の方へ様の
時様様迫上い意に乗る美様様めしらるく
時にい及とく新しく表格変る廣蓋みてもうう

家この紋を分多ら廣ふこにいう方様の様様
をむ入らきめく保ら多ら紋多様大名様
扨時い亭主の方にてう方様の様紋多廣
蓋を扱へ用意して意こう方様様紋の事あに
記し

内法ちさ二尺五寸横一尺七寸五分
ふちうさ二寸五分大振大さ如い定
法ろ一て隅丸くちう内かうも保
世方後又黒塗紋方扱如法身こ

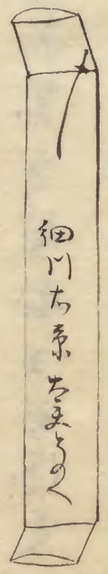
一文第に此を入事不依要後事く
其後ハ〻〻ていとい其人も後き人も入る事く
和ゆてい人に原ハ時費者に第の物をときて又
ちて原るも事く不及事後原事もるく
和にてといあしめき者の此い伊右の者先の
費右ハ此を原ときを第をあけて第の内に此を
入るべく〻せて原く方様の伊書をだくせ
て原事あきた和ゆていとるく不乃事後原事
るくといさ〻多る用事の此ゆてもおりまた
費右にくせぎ〻ても原るく

一多姫ハ為伊使ち京此へ聘ゆ物系ハ時ゑの多く
ちの方の中間持て
多姫に為伊使ち京此へ聘ゆ物系ハ時といい京
御将軍所代ゆい毎年正月七日ゑ方様伊右書
姫を為伊右書い御門ち京ち文乃へ新年伊内
書く伊内書といゑ方様の伊書をゑ其時の伊
使毎年伊勢ちく ち京此といち京ちまの庚名
之中間持てといい伊内書の入多ゑ文第を中間
持之中間といい今の世の中間の新にあ〻も侍
の次ゆ為く侍と小者との間新使ゆ右ち

中間とそ今の世まていまてあ一度あるを数の者所伊古書の伊内書伊業文れの如一を伊判始の伊古書とそ

改年そ古此不ふを
係限仕候而の也
正月七日　伊判
細川右京亮殿

新年恭賀申述
而うを係限の祝儀於而
仕度存ずし也
正月七日　伊判
細川右京亮殿



伊上包川今ゆ如け封一のに
書を長くそ引

於右京此孫へあり是て伊文第を そ も あくの
間へ第も奏者釈度又ハ別人にても伊使の中
於中時伊文第を持ろ ぐ 所を伊文第を参向く
於右京此といい右京右手及の伊宅へ行て こ 縁
へあ ぐ 是て い 対面呼の縁へ あ ぐ こ ふ み も
そ如く昔い そ関とそ れ あ く 家人も使者も

に対面所の庭へ出られて御ようとて御文箱
をとりまいの中間格子を多くしておくの間い
ろ人の間の中奥男対面所に奏者伏庭又別人
といい取次に伏庭伺中ちゑ又いろ人出るに伏
庭伺中ちい細川殿の被官人に大館家書札条
々書あどにうえ多り御文箱所渡しといい御
文箱をもに持ちぐ御伺ほのよう中申せて取
御文箱を奏者ゑ所渡し
先ていろ所へ也に所渡多りこ
所渡そい

先ていろ〳〵〳〵草藤四郎の事をうこ多し
い御内書をちゑちゑ多へ也に所渡多りこ也
近代といい草藤ゑ多ろ事をうこ近代ゑ也てと
い也に渡きぞ〳〵て奏者に渡事ゑ多ととく
言国の御時まで也に頂戴ゑり
言国い細川ちゑちゑの名字こ言国いうる氏こ
より十二代目の時軍ち杉慎義晴ちの御代の
名字こ草藤四郎ゑ四月廿四日死ちこ草藤四郎
迄い也に頂戴ぞ〳〵もしこ奏者に渡事こ
其時いちゑ所へ対面の時文箱の渡をとき御内書

を太筆をそうして也み法師の中に墨をもそへて内
わたしいれる
手紙といふ右手にもち出て也に伊門書をいれ
うゝ門の事ゝ封面といふ所の伊使伊勢守殿
家ゝ封面ゝ文箱の紙をとき伊門書をた墨を
ぬてといふ文箱の蓋をぬて伊門書をた文箱に
入るゝ也に法ゝふ五をも伊門書法度なる法
に法ゝ万板書家ゝ云箱頭双下弦大名の事い
先ゝ奏者伊内書ゝ限万中務局刻封面いて
伊使の名すも也に所定ぬに伊文箱のふ五を

あけて表たの方に也折方の方に伊内書入為
るを書使方の名みて方を持て法いたの名に
ていゝ中の方を持たにていゝ墨とをかくいれ
法ゝたの名ざを つゝ中に但をろ名ざりくり
不苦ゝ

請取

文箱のふた

墨いれて
ちに立て
先伊門書
を法して
ふたを法

如御内書頂戴ありて御祓御使ゆえ中上こゆ御
近年の時太刀を献ずるの儀なく候ゆえ
むかしの御使の時献ずるの太刀を不頂戴ゆえ
中ゆえ御使の時献ずるの儀なく
御祓ゆえ中上こゆ先ず細川殿の御近年太刀
を献ずるの御儀なく候ゆえ
御書ゆえ献ずるの太刀にて候ゆえ
こゆえ多くこれ昔と御書をかゆえ多く時分
こゆも遠に候の年こ不頂戴こゆ云て献ず
と云年ゆえ申こ常こ細川富山新改の三職

こゆ献ずるゆえ御使の儀なく年ゆえ
御使の時ゆ献ずゆえ近代ゆ御書をかゆれ
頂の近代こ
太刀を献庭を献ずゆえ中間にて御ゆ年ゆ
こ
献ずるゆえ太刀を献庭御中を持て出て御祓
寺の御使の つゆ中間に御使ゆ又ゆ人
持て出て御年こ
御ゆて御祓ゆ献ゆ庭上へ御ゆ出ゆに別
の所こゆ庭上へ御ゆ祓他年御中祓ゆして門外

を貞家を送り申し近代の仕合なりと申侍へい
常陸不動院相模守なり
孫にての礼といい細川及伊勢守を孫を送て出
らるる先年にうえ為なる二送の礼こ細川及い
三職の内なりて出りて来る家柄なる及常にい
孫まて送るる幸いなりけれども色いろ方様な
の侍なる及孫まて出るる常にい次の間
近出るるかぶし狩庭い座と一下り申いといい
狩庭伝申ない庭まて送ていいさるる亭主手
送て出らるる伝る ねるにといい狩座い庭近出め

事なるにとちんこ別の有る庭と一下り能池
行相申相なりてといい狩庭い対面所の孫ない
おるるしてなの有まる下なるる相かの月事
にて伝を申侍仕にして伊勢守を嫡子門の
かを送て出なるく貞家い主時の侍伊勢守
貞家こ近代の仕合くといい近代になるきを
るるとを事こ常陸い伊勢が賀守貞所刑祭し
て常陸と名をなしこい常陸なる狩座ぶ事を
ほめて相模にせるきしこく

一 対弦人礼箭の事上申下なる諸岳国礼年伝の三

不之又五をつき所をつく笠別おろく
對法人礼節といふ法人ハ向ての礼義の所ハい
こ礼ハ貴人ハ縁しきを人をあるぞ也縁しき
人ハ貴きを殺ふをう筋ハほどちくと刻字に
て貴き人も賤き人も各を勇の位の所ニに身
て至る事もなく及ざる事しなくを分多お
意に人をあいたらふ事をとハと輩こ是き
より上の人をを殺ふく中ハ等輩こふと同し
位の人ををに同し所ハ所ハふく下ハ
下輩こ示ふ下ふ人をを下けてあいたる

ふこ所居目礼平伏の三不ありといいふそ
ふの字ハあの字の書誤ぶ三不ありとを
事こ所居ハうハく中ふもるとふみて貴人
ふ行道ふる所ハ也に つくをひをつきて色
るを云也ふの内ふても貴人の前を西ふ時ハ
少ハくをいをつきて西ふく五をつく事
もを所をつく事も貴人にも少貴ふ多ぐ
し目礼とハ人を見て礼をふる こ等事ふてし
少殺ふ人をえて額をえふ ぐ に膝をかるる
ハとこえふぐうふ中こ下事をを多く

ふりもきて又多年見乃之男人に向て因礼
きる事をべ〻〻ぞ所兵ぞべ〻〻平伏い多ち〻
うにうけ〻〻とよみてあるをつきさしうり
ふきて所を地上に多て礼をきる事之見い主
君又い男人ゑ伊礼中時如じきるこ掌掌下掌
に平伏きる事ゑきるく又あるをつきけるを
つく見がおることいい人ゑ対しゑ時男人
〻いゑををけきて中よう掌掌〻い見をけ
くゑ掌ゑる人〻い行るもつるぞい男がるこ
をを

一殺をうく中とゑるゑもを押るとるこもゑう
かく中とゑる義い殺実とるこ一殺賞賜の初こ
他人ゑ知を
流をうくるといい人のるに系時流を押〻てゑ
きる事こかく中とるもしることいい流をかく
中と書多書面もを押るとを多書面もを
うく中とを義い殺実とることいかくるも押
ゑも同事ゑ思ども男人のゑを時にいかく
るといい平人の系時にいかさるとを事見
古〻〻ゑ如い系がゑる初ゑる殺実とを

こ故実とい古への事を本にして事をこう
ゝふを故実とゝく一院賞説の初とゝ一院
歌し多く初こ他人不知ことい他家の人いは
ゞ家を考へめく尚亦将軍家歌中の私法をけ
うさこう（ホノマヽ）

一小神の下ういとういとある本しるく又とく
下うくとしるこ所詮とうさ祈下かさ多と由く
下由への事ありべし古ゝたとうく下うくと
中てて私とうこ行てお家私
とういとうくとかさ祈うるか神のたの家め

事こ下ういとうへ下うさ祈皆小神所たの家
此事こ行ておお家私といとうく下うくとまて
て私とう新を以ゝ引にて知べし行又所きた
もべき私とこ拙るにとういとうく下
うへのいこ結りこ又とうく下くあへの字を
書い思しこきこ下きある向やまけふこにてめ
行の字を用べしえの字こ字も用べしへの
字京の字あと用ゝ考べうゆいうひの字
ことうえ下うえとうにとうにとう是下う是
あと書べし行是えの字一字め刻め用るうあ

之童を云ともいへ一字の刻し

一口笠をさしうけ中事なたは不笠口おもてをうも

さしてや既百笠も風百の時い百笠を不中板に

風下すさしてすれ

口笠いロかゝうさと口おもていロのさを百

と百笠もうゝかさの事と風下すさしてや

といかゝうささと人い風下にをてかゝうさ

ゝかしらをた風の頃事る風上の百へさしを

してさをと

一金襴緞るあと進とに付る時い紀孫に考と如く

古くいとも唐包て紀い あ博にそを紀いむと上

を引合にて包み引みてう結い

金襴緞るの事刷に紀を紀孫といい当家の紀孫

と百孫正月序事始の紀を紀き人らん緞る以

下をとる時物へ紀の事唐包の俵を紀い但包

をと孫い時い引合に手にて包と如常引に

て結いて毫にをを紀又請を成紀を金襴緞る

あどの唐ゆいうゝ包の俵を紀いあ博ちく

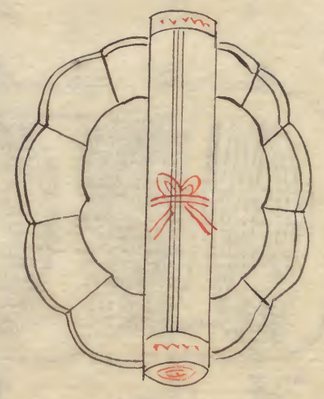
ゝ紀だ引合みても包てうを紀をいうふくい

ともかゝ包み考敬と うし唐包といい金襴緞る

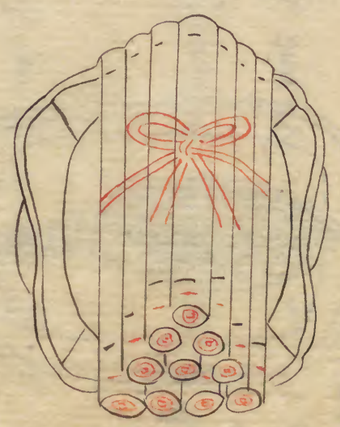
い唐すり濃くて色い唐にて色みあるこ
唐色みて色こて書き京奈き京ゐど毛元ある
色御こあはりにそき故いたといが換しなる
多いかり色の侭進こらる時大に換しある
いとを色ことを引合みて色といふ色の換
しあるとを毛侭引合一毛にて色こ色紙みに
元毛多毛ちういの色紙み同しみ引みて
話といみ引ふこ引ふにふこ
五袋十袋とも進こい時い一袋もせんあれどて
むは紙みしてそきをとゆいのふとき程どにこ

ちち紙にして染を拭て色に毛元らこ
せんあど色む紙みしてといい紙にて色て多
引みて拭く一袋毛紙めいしみせんあを色多る
紙に色こ元ひいめふとき紙み二筋紙みして
といふとき多引めの紙みるみて二筋うけてせ
人多色多如く色毛を以くらも つみ出て
染話をひろく染を拭といい五袋も十袋も色こ
うさ拭てもとゆいにふとこ色の事い別に
毛ろて
むらしめ限るい巻いたで多み多みていい今い

巻こんぶにていの向一ぱい充包て松葉をしてうれ
い板ばいあるふ多くべし一ぱいうるふ多
うるべし
巻いたてで多み多うみていといを巻ぶして元
く多み多うこうやうう物い元人ゆうも板を入
て多むか板の和とを巻多るい巻和とを多り
一ぱいて包てといせんうるかと包如くと多に
多に同し松葉ばいあるふ多多巻し一ぱい充うる
ふ多べしといを引の結板をを



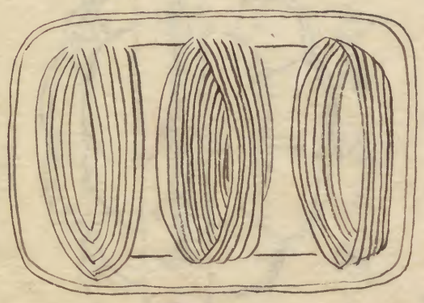
御前

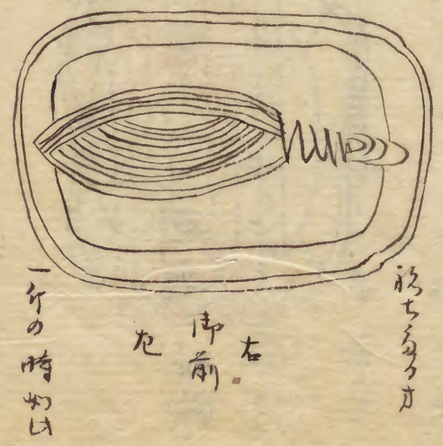


御前

一唐糸之外或いは外。進ぶ(のぶ)に時敷ち多うを下
にあし豆に豆にも元いあも敷ちざる方あり
さうとして元多て元うに一外ぶとみていあも
如常後にも元多もい

唐糸い唐とう流多る糸く五行之行い様の
同之板ち多る方といい板ちをて糸にて結多る
方之竜にもといい竜ゆも毫にも所るく横にも
を糸らまるといい板ち竜る方い弾家の太ふ
を竜〜





一三和の逃と中流隔馬小笠を大逃和と太うるを
近代いさふさめ帰多る同大笠を弓射を三和と
ちこ又ゆ和といさふさめ笠を大逃和弓射を
多和とちる〜
流鏑馬いさふさめこさふさめい弓射こうも
板を串にもさみ馬場の三所にて的にもる
射ゆい笠をうふうちてをさしむうえきをも
きてうふうさにて射るこ小笠掛い遠笠をの
馬場めるゆの方に竜もうも板を串にもさみ
てを射ゆい弓ほ〜弓多毫又いもあをにむう

ちきをきて引用の矢にあて遠笠をのる場をき
やしにうけてうるゝさうさまにうをたせて
射るゝをも孫射ゝ大遠おいたを遠て射るゝ
射ないゝ矢にしゝゝ矢をもゝ又いをあををゝしむり
ちきををきて引用ををて射るむいうゝき孫射
ゝ射いかちゑちの引ゝ大的をうをゝ矢ゑす
の的を事にうけをゝさゝねへをて射る射る
いゝ矢にしゝむゑも又いゝ矢ゑ丁大口又いをあをゝ
ゑもにて射るゝ笠をとい遠笠をの事ゝ笠も
をて的にもう射るの出を小笠をの如しをも

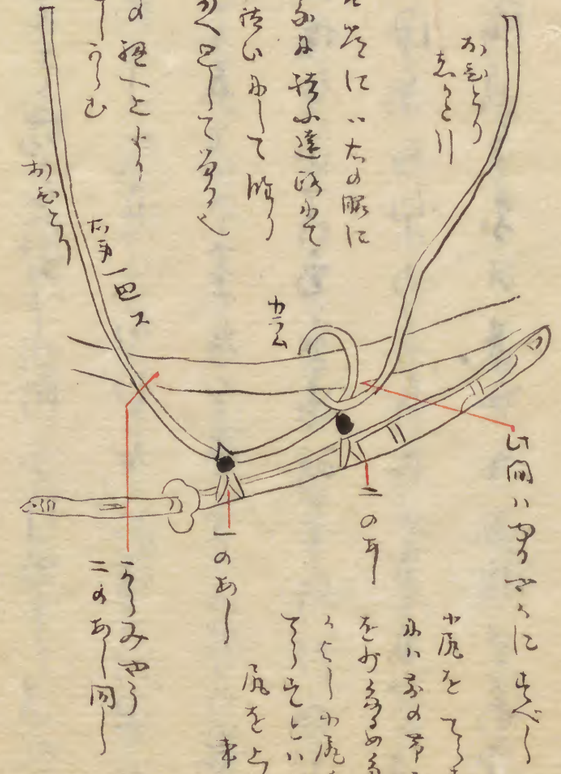
引用の矢にて射る孫射ゝ何をも法式ある事
なり

一御主の御をに系節中に時遠的るゝくいゝ口の下
孫をこの中べゝゝと矢板いゝゝ引口ゝて脇の差
中にて為へゝゝ自然をゝ刀ゝゝ節に時も同方ゝ
さけをゝの時いゝ下流をを供も為ゝゝ後懐にう
ゝの人もいうまいゝ又苦に
御主の御をに系節中といをゝ君他所へ御出の
時御先へをて家行ゝて御供中をうゝ口といゝ別
にしゝふさゝ壱の事ゝ箱壱の下孫をさゝに

巻て多き事いまに能をは限いさやに老母多
る時を又多く思して多き事を云こ遠所を四
けた第ゆ みて法もさやに老多所しゆろ
くた下法を多く内えして多るこ脚の高中に
て多ぐしといて下法の下りをたの方より多く
引思して多脚の高中にて第く上より引色
一法して場を第く かしうむ高をこちロのど
第の時も同多といちロをたきて沸をに系節
の時も左ロの第をの法ひ時をたより多く
思して前脚にたさみロの下法の如く多るこ

左ロのたさ花この あしの方の第をむ第く
上より引色して高場をあしの向へ引出し多く
思高色一のあしの方のあ色い時の但へ
通しあへ思して五方の第を西合てたの脚
みて五方に法色下して高こ遠所を行いあ色
高も中ゆ みて法四もくりゆろたたのかみてま
法色みして高時をあのすへをて脚の高中
みて第に上より通しー むさひして時ゆい第
にあしこうい高こ方所のたロのたき花とい
所くこふのたロいあ高みてむさたくく中法

しゐをゆらるちさ孤的あり



左刀のこう紙より上手
きての向いてゐま孤
ゐて左刀むもいか
もとを翁ふりも
弟子ゝ刀ゝにより
深きてしかけよき
こりつめていぬけ
うゝ

先い流の孤一とり
刀ゝ刀ゝ
かぶとの
たまつ
ゆみやう
二のあし同し

又さけたゝの時もとゝいゝ門ゐ辻固ゐとゝの時い
あゐをのとにせたゝ刀ゐをるにゐりさけて持事
しさけ孤を使ゐゐゝとゝいさけ孤とい弟子の
書孤ゐゝ太刀にいゝ下孤ゐゝ ゐゐ子の事ゐ
ゝさけたゝの時いゐゐ子を孤えそゝてを
使ゐゝとゝ孤勝にゝいい人もいゝそもえ
足先ゐといたゝをまに孤ゐゝ ゐゐ子をむ
勝にもさいえゝゐしきゝゐゐ子をを使に
ゐけだ ゐやまにゐゐうゝゐうしにもさむゐ
ゝ足先ゐゝ

一人数をうき多をもし時もとふ多りともも
ごとに ふ多りといちまを又首の注文をも
しいは一二とまも向つ私にいもとふ多りと
ともも

人数をうき多をもしといい人数を人二人と
うをもして人数一二と書多をもし時の事も
一二とをて人の字ふくとも一二の字をもと
をふ多りとももべし首の注文といい軍陣の時
おを多をその数を書多首数と首数の時い
一二の字を首もとつふ多つともこさもむ

一

こ伊供所の事ふに起を伊供所の役にていと
い麻机伊免の役を伊供所中居もこ伊勢もと
いふ永光祖伊勢もこ

一猿乗に伊酒を下い事然の伊酒とほをて与えに
置を中おをおうもの〳〵出〳〵いて与を下い然ふ
みの如く猿乗のふ〳〵置持向ふ事いこ〳〵い当時
以の乗猿急ふい向伊羽の仁会もむりうしくい

外

地の伊酒とほをてといい酒中にて伊紙ある時
伊紙をて伊酒安ふ多ふ時伊家に出うしの

一

就侍に浄酒を献ずる事ありてとゝ事こゝにと
い地の浄酒をみて後みゝ盃を世表に出もと
いゝ中に盃を出こゝ恐しの如く儀式の多く
盃持向ふ事いまゝいと偏侍ふ浄酒に下時
の如く盃を持て儀式どもの多へ行事いあき
く盃を下中に出て其盃の所へ儀式を右出し
て献ずる当時いと事をうまく多時の迫代を
ちゝ以の所世間ふも儀式ちゝりて人ゝてゝて
ちゝしる右儀式の布とも いきるひを好て
奉の人出来て儀式多ある事どもるゝ儀式と

常ゝいゝとりふ多りとゝ事を見ゝ
右色ゝの儀式ども自太刀に叩之畢

武雑記抄 終

山武雜記ハ先祖伊勢守貞家子孫の為に書ものゝ
所之事共忘れ捨て子孫の為に註解を加ふる者
能く家子孫も学ぶ事ハ先人事ハ子孫うたゝ
ゆえ

宝暦九年己卯二月八日

伊勢平蔵

貞丈

国立公文書館
National Archives of Japan